優 秀 賞（事務次官賞）
作文の部　中学生

『災害の経験をいかそう』

周南市立周陽中学校
２年生　弘中　よし乃

私は小学６年のとき、自由研究で、周南市に伝わる天気のことわざが当たるかどうかを調査するために、一か月間、毎日天気や空の様子ばかり気にして過ごしました。

周南市では、平成２１年７月２１日の朝５時５０分ごろから降り始めた雨が朝７時には雷雨になり、どんどんひどい雨になり、その日は一日中雨でした。それも今まで経験したことのない豪雨で、車のワイパーも役に立たないと父が驚くほどでした。特に昼はバチバチと大きな雨つぶがうるさいほどたたきつける雨で、『怖い』と思いました。たった９時間で一か月の雨が降る、すごい集中豪雨でした。

祖父母や親せきのいる防府市では、土砂災害のために多くの人が死亡したり、床上浸水などの被害が出たりしました。道路は通れなくなり、家や田畑もめちゃくちゃになってしまいました。祖父母の家も山がすぐ近くで、避難していました。けがなどはありませんでしたが、家に帰ると、山からの土砂や泥水が家の中に入りこんで、たたみがだめになったりしていて、後の掃除が大変でした。

私が調べた天気のことわざに『がけから色水（泥水）が出たらがけ崩れの前ぶれ』というものがありました。これは国道２６２号線の佐波山トンネルで実際に見た人がいて、当たっていました。ここはとてもひどい土砂災害があり、多くの住人の方が土砂に流されて死亡しました。

また、防府市では『川の中で石の音がおかしくなったら逃げろ』ということわざもあって、避難に成功した例があるそうです。

その他、私の調べた天気のことわざはよく当たるものが多く、その地区にはその地区のことわざがあることも研究してわかりました。そうしたことわざは、昔からの経験がいかされた大切な情報で、昔の人からの知恵の宝物です。

たまたま私は天気のことを調べたときに山口豪雨があって、新聞のスクラップなどもしていたので思い出せました。昔から伝わることわざだけでなく、私達もお年よりの話をよく聞いたり、いつも天気予報や実際の空の様子などを気にしてみたりすることが大切です。

そして、被災地の地形や天気図といった科学的なことも学んで、ことわざのように、未来に向けて知恵や経験を伝えていくことが命を守ることになります。

防府市で同じぐらいの集中豪雨にあう確率は２４６年に一度だと、そのときの新聞に書いてありましたが、その後、美祢でひどい集中豪雨がありました。ゲリラ豪雨は日本中どこでも起きる可能性があるそうなので、気をつけなければいけないと思います。東日本大震災では、想定外の津波で大災害になりました。わずかでも危険があれば、十分に準備しておくことが災害を大きくしないために必要です。

祖父母は避難するとき、近所の人に声をかけ合い、避難所でも勝手なことはしないで、お世話をしてくれる方に外出するときは知らせたり、決まりごとを守ったりしたそうです。そうした決まりごとを作ること、そして近所の人との思いやりやゆずりあい、協力できるつながりは、とても大切だと思います。土砂災害でも後の掃除は力仕事が多いし、お年よりや身体の不自由な人など、大変な人達を早く助けてあげられるようなボランティア活動も大切です。

自然はすばらしいけれど、その強い力で災害になったとき、人間はとても弱い存在です。だから、知恵で命を守って、協力しあって、立ち直るのだと思います。そんなときの人間は、心の強い、すばらし

い存在だと思います。

私が大人になって、母親になったら、子供にいろいろなことわざを教えたいと思います。けれども、私の子供だけが知っていればいいというわけではなく、多くの人がいろいろな情報を知っていることが大切だと思います。インターネット、テレビ、新聞など、いろいろな方法がありますが、一人一人が日ごろから、興味をもって準備や心がまえをしておくことが大切なのです。ハザードマップや避難所を確認しておくのもいいと思います。

今は祖父母の家は何もなかったようだし、あんなにめちゃくちゃだった国道も通れて、田畑もきれいになりました。川ももとの小さな川です。土砂崩れのあとには少しずつ雑草が生えはじめていて、そのうちわからなくなるかもしれません。

しかし、あの山口豪雨と土砂災害の怖さは忘れてはいけません。私たちは、多くの人や未来の人にも伝えなければいけないと思います。